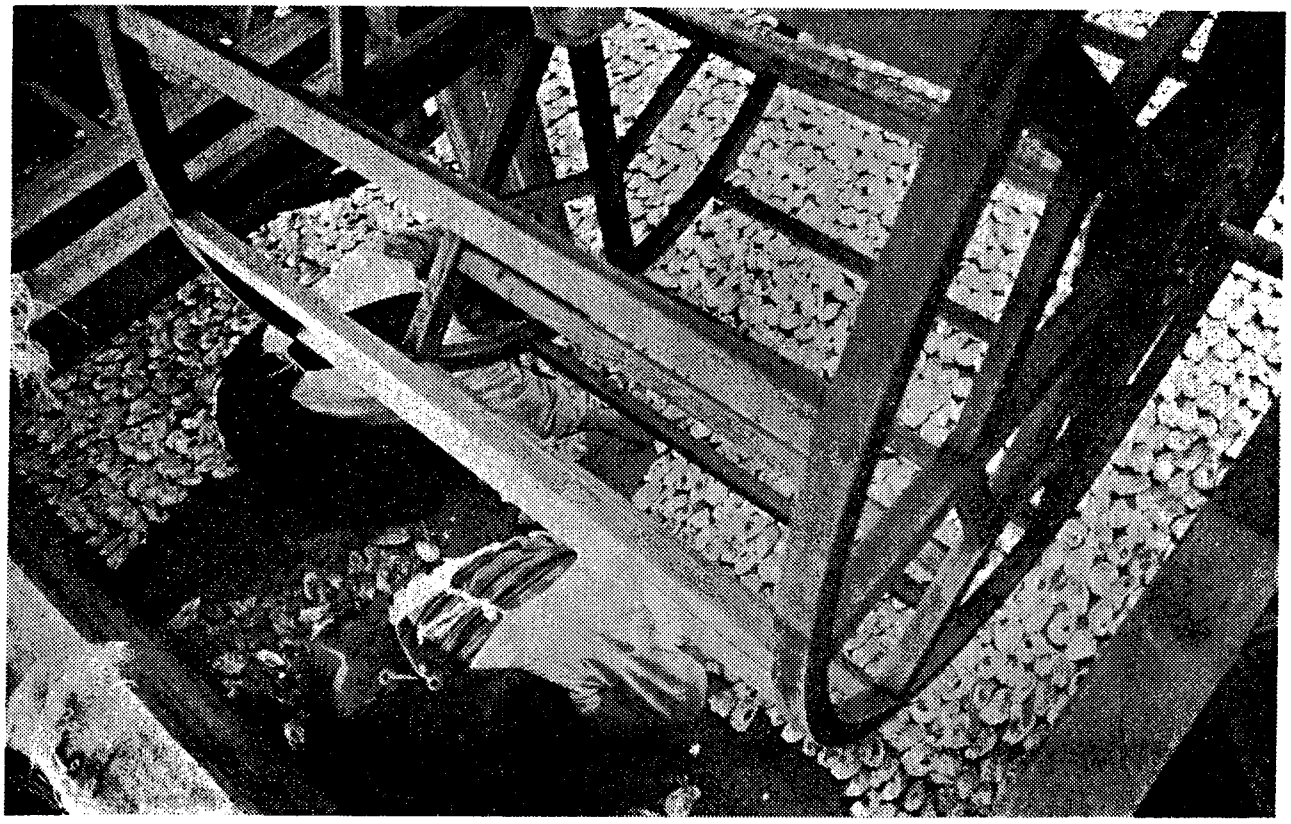
拓水

第四三号昭和卅五年三月十五日発行
毎月十五日一回発行　一部　十円
昭和卅二年十月十八日　第三種郵便物認可

三　月



（のりの人工採苗）

兵庫県漁業協同組合連合会
財団法人　兵庫県水産業改良普及協会

全国大会・雑感

川越　敬一

第一日　（二月二十四日）

午前八時すぎ、農林省着。庁内食堂で手軽に朝食をしたためて、七階の大構堂へあがってみると、すでに全国から集った人々で雑踏している。横井技師が兵庫県の到着を届けて、資料などを受取る。改良普及協会の林氏、但馬・明石の青年諸君の顔がそろう。兵庫県からの大会参加は今年は十数名。毎年そうするように、演壇に向って最右翼、前寄りに席を占める。

この日の発表、十九件のうちに本県から余部水産クラブ「災害対策を主とする定置網の改良」が含まれる。定置網関係の発表は、この大会にこれひとつだけ。発表者の尾崎君は多少上気味ながら、県大会のときより一層よくできた。

ことしの大会の特色は、婦人の多いこと。四十件の発表のうちに七件が婦人の発表――いずれも生活改善。来年は兵庫県からもできれば婦人の代表を送りたいと思う。島根県飯浦漁協婦人部の「うに採取による婦人部活動について」は、本県の但馬や家島、淡路南浦などの磯に富む漁村の婦人に参考になると思った。

第二日　（二月二十五日）

朝、農林省庁舎前で全農林職員組合の大職場大会。その混雑をさけるためにこちらの大会も三十分くりあげて開会。

この日の発表で印象に残ったのが千葉県金田浅海増殖研究会の「浮流し（いかだ式）による沖合養殖試験」だ。本県内海漁業の安定をはかるには、冬枯れをどうするか、それにはノリ養殖が一ばんよいのだが、干潟の少ない本県では、耐波性の強い沖取り養殖が向いているので、大いへん関心をもってきいた。

この他では、和歌山県白浜漁協婦人部の「漁家の月給制」と岡山県田之浦青年団の「漁家生活改善のためのアンケート調査について」にひかれる。本県でも、東二見の十五人組で「月給制」の構想を取りいれること

水産ニュース

☆第一兵庫丸第十一次航海に就く

第九次航海

二月十日第一兵庫丸は中間手入れを終了し同日三瓶港を出港、鹿児島より約三昼夜の航程にある、東支那海漁場で五日間操業、同月二十二日鹿児島港に入港左記の通り水揚があった。

漁獲数量　約三一、〇〇〇キロ
水揚金額　約一、四〇〇、〇〇〇円

第十次航海

二月二十四日鹿児島港を出港し、三月二日夜半大約満船となり、操業を切揚げ帰港したが、内地市況は連日好天候のため、九州近海の揚繰網漁によるアジの豊漁と房総沖の釣サバ豊漁により、水揚地各港の市況は混乱に近い暴落ぶりのため、入港地の選定に苦慮したが比較的市況が安定し、漁場に近い鹿児島港を選定し三月五日入港左記の通り水揚した。

漁獲数量　約四一、〇〇〇キロ
水揚金額　約一、三〇〇、〇〇〇円

なお水揚終了後、積込作業を開始し出港準備を完了して、七日東支那海に向い第十一次航海に就いた。

目次

水産ニュース……1
全国大会・雑感　川越　敬一……1
漁業今昔　いわしの巻(4)　平岡　安民……2
「漁協婦人部映画」　さよ達の願い……5
ある漁協職員の　楽餓鬼帳……6
昭和三十四年十一月、十二月の海面漁獲の概要……7
昭和三十四年一月より十二月までの海面漁獲の概要……7

とができないかしら。あるいは岩見では可能ではなかろうか、などと考えた。

第三日　（二月二十六日）

会場を赤坂の日本都市センターに移して三つの分科会に分かれる。私は第一分科会（漁業・経営）、横井技師、林主事は第三分科会へ出席する。明石の諸君は、静岡県御前崎へ遠洋マグロ延縄の視察にいく。但馬の人は、三分科会に適宜分散。本県からの発表者は、柴山も余部も第一分科会。

分科会は、まず発表者への質問からはじまる。ところが、冒頭に福島県の発表に関連してタコについて議論がわき、約二時間をこれについやす。タコの本場、兵庫県のタコの産卵つぼ投入の実績や方法をたずねられた。「産卵つぼの投入は、タコ漁業者の義務と考えることが大切です」と強く断言する。

余部の発表の中のクラグはかせ網は多くの人の関心をひいたようだ。やはり予想どおりの注目をあびる考案である。柴山の「図解決算書」もまた多くの論議を生んだ。そのなかでこんな意見があった。

「組合の実情がわかりすぎると無用の混乱を招きはしないか」

それに対して柴山のクラブは

「そんな事実はありません」

と軽く受けたが、私は発言を求めて

「そういう考え方は組合の民主的運営に反する。また研究クラブの青年諸君は、組合執行部（役員）が発表するところをわかりやすくしようと努力しているのであってもし組合運営にミスがあれば、それを反省するのが組合の総会である」

と反パクした。会場からは拍手がわいた。

第四日　（二月二十七日）

全漁連製作の映画「さよ達の願い」船おろし簡素化をめぐる婦人部の希望をえがく。つづいて審査発表―ところが期待に反して本県は受賞なし。「進歩向上の程度を考慮した」という講評であった。それもよし、全国の水準向上をともに喜ぼう。賞をもらうのが大会の目的ではない。本県は、大会のたびに何にかユニークな色彩を出すことにつとめてきた。今年の大会の二つの発表も、充分特色に富んだものであった。全国的な影響をなにがしか及ぼすにちがいない。

（県水試）

漁業今昔

いわしの巻（4）

平岡安民

第七大徳丸

北は北海道から南は鹿児島まで移動するいわしは海の渡り鳥である。これを追って動く漁師もその仲間である。いわしは世界中にいる。対岸カルフォルニアにもいるが、それはうろこの数も少く日本のいわしとは別系統のものらしい。

いわしの群といっても日本海での往年のそれは、その量において内海の小いわしとは桁がちがっていた。大正の終頃私は初めて乗った運搬船で江原道沖を走っていた。或日紺碧の海の色がにわかに赤黒く変ったのに気がついた。雲のかげかと思って空を見上げたが、一片の雲もなく晴れている。

「どうしてこの辺は水の色がちがうのだろう」と船長にきくと、

「いわしさ、いわしの群ぢやよ」

と事もなげに答えた。まさかと思ったが船首に立って瞳をこらして深く澄んだ海の中をのぞいてみた。なるほどギッシリとつまった濃い魚群が船の音に驚きもせぬように、少しの乱れも見せず南の方向へ流れるように泳いでいる。このありさまでは一寸頭をふることもできぬほど、すきまなく無限大のたばになっているのである。米粒ぐらいの気泡がその中から、ゆらゆらと立ちのぼっている。飽かずながめていたがいつまでたっても、この魚群は切れない。約十五分四キロに余る長い間、この大魚群の中を突走ったのである。奇しくもこの時乗っていた第二住吉丸は後年北鮮で、岩礁の色をいわしの群とまちがえて、これに乗り上げ沈没してしまった。それほど海藻の生えた岩の色もいわしの群によく似てい

るので、この時も丁度無数にいた魚群の色と見誤るという不幸を見たのである。

この頃港の中には魚青丸というアメリカ式片手まわし巾着網船がいたので、いわしが沖にたくさんいると話すと、あんなのに網を入れたら、網は一とかけらもなく取られてしまうと云っていた。小さい群もおりそうなものだが、小魚群をさがすのがむつかしいという状態であったようだ。

昭和の初めから終戦まで、このいわしが半島漁業界にブームどころでない、いわしラッシュを展開した。農業者も商人もおよそ金の工面のつく者は挙ってラッシュに加わった。自分は船のことも網のこともわからぬので、雇入れた漁撈長を頼りに、のるかそるかの大バクチを打つものが続々と現れた。郵便配達をしていた人が、数年のうちに、今でなら数億円の巨富を積むという好運の例もあり、失敗して親類縁者も道伴れにはだかにしてしまったというのもたくさんあった。

小は刺網から大は巾着網にいたるまで、いわし漁業に関心とつながりをもたぬ漁師はないという位大きな産業となった。最盛期には一統一漁季九千屯の漁獲を上げる船もあった。あまりに大量なので、大部分肥料とし一部だけ輸出向けトマトサージンにされるというありさまだ。

私も一尾三銭のさばをとっていてもあまり身が入らなかった。折柄町内の缶詰会社からいわし産業の蔭の一員たることを勧められたので、それに応じた。事務所のさばきから、機関の整備もする。ボイラーも焚くし、シーマンも踏む。必要とあれば刺網漁船に乗って海上の指図もする。浅く広く器用貧乏の標本見たいな男がこの小さな缶詰会社の工場長として迎えられたことは偶然でないかも知れない。ここで八面六臂の活動をするというと景気がよいが、実は仕事のはしくれから、はしくれまで追い使われたのである。しかしこれも私の性に合わず暫くでやめて、又さばやたらと共に暮していた。

いわし巾着漁業は次第に盛んになり船も百五十馬力から、二百四十馬力という大型の片手まわし優秀船がどしどし造られて、この時代の人々の耳目をおどろかす活躍がはじまっていた。このうちの一隻であるところの第七大徳丸に機関士として乗船をたのまれたとき「漁撈長ならおもしろいのだが」と二の足を踏んだがそれでも一般のいわし熱は私にも感染していたから、何でもよい巾着網船に乗って見ようという気になった。

M漁業会社の持船三十余隻のうちでも、一番の優秀船第七大徳丸は檜と欅で出来た堅牢な一級漁船で総員六十人が乗組み勇躍して、舞水端漁場に出動した。

漁夫は内地人十人と半島人四十人とから成り、この中に岩置き、あば置き、伝馬乗り、ローラー係、ワイヤー係その他役付中堅漁夫がある。その上に船頭と称する漁夫の親方がいて労働を指揮する。船の幹部には漁撈長の下に副漁撈長がおり、トップ上り、魚見などがいる。これに漁船固有の船長、機関長、各船員が若干名という構成である。従う僚船として先漕船、運搬船など四五隻、〆めて八十余人の一船団となっている。これが漁撈長の指揮のもとに漁場に繰り込む。二百統千余隻の船がぢくろ相ふくんで出動するさまは壮観である。

いち早く大群を旋した船は原色鮮やかな、船名入り大漁旗を檣頭高くかかげる。これは乗組員の元気を鼓舞するためと、漁撈長がその腕前を他船団へ誇示しようとする意味もあるらしい。漁撈長という職業は当今の球団の人気選手のように、成績がよかったら各船主から引っぱりだこになる。そのような幸運を常に夢に描いているので、機会あれば宣伝につとめようとする態度が無意識のうちに現われる。もし不漁に終れば次の漁季には水夫一人やめさせるよりも簡単に、クビを切られる。それどころか漁季中にでもお払い箱になって、梱を担いで下船せねばならぬこともある。船員手帳をもった正規の船員のようにその船とのつながりもなく、会社との間も水臭くて冷たい。漁獲成績を上げたら有利な立場を身につけて継続乗船はもとより、他社からの引き抜きにも応じかねない。浮気女のように思わしい相手に秋波も送りかねない。会社の浮沈を担うといわれる漁撈長は、いわし漁業の花形であると同時に浮草稼業のはかなさからものがれ得ない。

昨年までは「どうか使って下さい」と百方コネを求めて運動して採用されたのが成績を上げると忽ち地位を替えて、会社から辞を低うして「どうぞ当社に止まって下さい。どうぞ本社へ入っていただきたい」とおがみこまれるようになる。こうなると会社重役以上の権威をもち、歩合

制であるから、収入も漁夫の二十倍にもはね上るのだ。

私は機関長として乗船したが、あわよくば将来漁撈長をやる機会にめぐまれるかも知れぬという淡い望みも持っていた。会社でも、船長の仕事だってやらせばやれるし、無線室でキーを叩く事もできる。事務員の仕事もやるし、経歴からいって漁撈長候補にも推せるというわけで缶詰会社同様便利な男ということで引っ張り出したらしい兆しもある。

何でも間に合うということは、すべてが代用品的にできていて、何一つ本物でないともいえる。自慢にならん。しかし代用品でも何でもよい。社長以下皆、客分扱いでサン付けで呼んでくれるのに気をよくして、大徳丸の機関長室に住むことになった。

初めて沖へ出て網を入れた。新しく雇入れた漁夫が多いので仕事になれず、ヘマばかりやるので、船頭はあせって声をからしてどなっている。機関の音、ワイヤローラー、ネットホーラー、ワイヤー箱あらゆる雑音に船べりを打つ波の音、どなっても聞えぬと見ると、呼びかける前に足もとにあるいわしをつかんで投げつけてから命令する。のろいやつは引っぱたいておいてニタリと笑う。牛のケツを叩くように荒々しい扱いの中にも、かくれた温情がチラリとのぞく。船頭はこうして部下五十人をわが手足のように動かすということが要求されているのだ。又船頭を船長を機関部員をわが手の指を屈するように働かそうとして漁撈長もわめき叫んでいる。調子が出るまで数日の間にすっかり声帯を破ってしまう。

このさわぎの最中でも、網を扱うのと反対の船側には十人くらいずらりとならんでゲロゲロをやっている。私はブリッヂの上へ出て専ら見物役にまわっていたが、

「大した波もないのに、こう酔っ払いが多くては困りますね」と船長に話しかけると

「なあに、すぐなれますよ、それにね、あいつらは家で食ったことのない米の飯をたらふく食おうというのが目的でやって来とるんですからね。初めは食いすぎで皆胃をいためるんですよ」

なるほど過激な労働のあと、いわしのなます塩焼きなど十尾くらい平げるついでに、三ばい位オーバするのも無理はないだろう。

船尾の漁夫室へ電気の配線などではいらねばならぬのが一つの苦労である。天井は立って歩けぬほど低く二十帳ぐらいの室内に四十余人が雑居し、魚箱の魚のように、頭をそろえて寝るので、人いきれどころのさわぎでない。二十才から二十五才の若者ばかりで、各人の体臭も強い。各種排泄物のにおい、にんにく、いわしのあぶら、たばこの煙、あらゆるものが入りまじって、どぶをかきまぜたような悪臭が立ちこめているので、ここに暫くいると胸がむかついてきて、舷側のゲロゲロ組に加わりたくなってくる。

機関部の頭痛のたねがある。この漁夫室の連中は時々盗電をやる。大きい電球をかすめてきて明るくしてバクチをやるのである。電圧が下がったなと思って、のぞきに行ってみると果して百wを三つもつけて紙片をならべた一六勝負に夢中になっている。一喝するとあわてて消すが、しばらくすると又つける。今度は上からどなりながら、部屋の入口の炊事室の鉄板をハンマーでやけに叩いてやる。すると中では鼓膜が痛いほどにひびくので効果が上る。これで先づ一日位は大丈夫であるが、あまり頻繁にやられる時は船頭に叱言をあびせる。すると船頭は飛びこんで行って、

「このいわし共め」という口癖の罵声と共に、そこにいた手近の二、三人をポカポカとなぐりつける。機関室から大きい電球を盗んできた張本人がなぐられずに済むと、彼はしてやったりと大笑いしている。

それでもあまり日が経たぬうちに又盗電をやると、寒い時分であったらバケツ一杯海水を汲んで行って、入口の高い所から車座のかたまり目がけて

「このいわし共め」というかけ声に力をこめて、冷たい水をぶっかけるのである。こんな時はさすがに恐ろしい親方にも黙っておれない。

「エーイ畜生め」

「バカタレー」

という悪声が下からわき上ってくる。すると船頭は、愉快でたまらんという表情で甲板上に出てワッハハハと、そり返りながら哄笑するのである。

しかし私は一日彼等が手なぐさみのためにのみ盗電するのではないことを知った。彼等の中にも一、二名雑誌のようなものを読むものがあって、もう少し明かるい光を欲していることに気づいたのである。又彼等の集団からバクチを取り上げてしま

い、明るい光を奪ってしまえば、漁夫室はあまりにも陰惨な暗い穴倉となるだろう。しかし暗い穴倉は漁夫室のみではなかった。機関部員の寝室は機関室の一隅にあり、その床下は電池室になっている。酸っぱいガスが昼夜をわかたず、妖気のように立ちのぼっている。

この毒ガスの部屋で自分の部下たちが半年も起居するのかと思うと身ぶるいが出るのである。外観は堂々たる優秀船であるが内部の人間が、船頭がいみじくも喝破したように、いわしと同様に、それも船艙に積まれたいわし同然の状態であるとは、誰が察し得たろう。

しかし彼等半島人漁夫はいたって朗かである。船室が暗いといっても彼等の住んでいたカンテラの部屋より明かるいのであろう。もちろん臭気などがあるのか全く気づかぬのである。船頭の扱いにも不平を感じる様子はみじんもない。この親分は粗野で短気であるが、意地悪さがないし、雷のような一種の痛快なさわやかさを示す男だからである。彼等はいわしであったとしても極めて潑剌と生きているのだ。頭痛に病むがものはない。電池室だけは何とか考えたい。

「漁協婦人部映画」〝さよ達の願い〟

☆　漁村を描いた、漁村婦人のためになる映画として、かねてより全漁☆連、及び関係団体を始め、全国漁協婦人部員が、一人十円づつ醵出し☆て製作中であった映画「さよ達の願い」がこのほど完成し、過般全漁☆連よりフィルムが送付されてきました。このフィルムは県漁婦連で保☆管しております。漁協婦人部を始め、関係団体に貸出しを致しますか☆ら、御希望がありましたら県漁婦連までお申込みして下さい。☆

映画のあらすじ

漁業協同組合の婦人部や青年部が漁村の村づくりを志すと、必ず大きい壁にぶつかる。その一つが古い生活習慣である。

「さよ」達の村もその例に洩れない。さよを始めとして、婦人部班長の「みゆき」や未亡人の「千代」らの熱心な努力で、日用品の共同購入や、家計簿の記帳などもやっと実を結びかけて来た所だが、出船祝いを簡素化しようと計画したことが色々な波紋をまき起こす。

出船祝いには、二斗も三斗も酒を買って飲み明かすのが慣習になっている。でも女房の着物を質に入れてまで、出船祝をする様なことはやめて、三升で済まそうという訳である。しかし慣習は、それを固執したがる人には、それぞれ手前みそな理くつがある。浴びるほど飲みたい亭主達からみれば、三升とはいかにもけち臭くて、それにつき合いの体面上も正面切って賛成しにくい。老人達からみれば簡素化なんて縁起が悪い、録なことにならんといいたい所である。

もともと此の出船祝の簡素化は、さよがいい出して、婦人部で話し合って決めたことである。しかしさよの亭主豊吉は、手漕ぎの船で一本釣をしているのだから、今度の「えびす丸」の竣工とは直接には縁がない。しっかり者の女房を信じてはいても、チャチな出船式だと村の男衆が云うと、どうにも板狭みでやり切れない。そして船を見送りに来ている村の人達の前で無茶苦茶に酔って、「三升とは何だ、けち臭いぞ」と暴れこむのだった。

やがて「えびす丸」は三升の酒を乾杯、子供たちの手づくりの万国旗にかざられて出航する。しかし甲板を洗いながら、ひやかし半分に歌われるソーラン節までが、簡素化節だ。

〜ヤーレン　ソーラン　ソーラン
無駄を省いて簡素化しましょう
貯金してから嫁もらう　チョイ

そして波打際に流れる寄るコンブを長い竹で拾いあげながら、女房達の話すことも簡素化の話題である。簡素化っていうけどむつかしいものだ。いや反対したのは飲み助だけだ。漁師ってものは陸のむづかしいことは女にまかせっぱなしだもの。でも陸をあづかるにや、それだけの値打がなきや。と仲々鼻息が荒い。

酔からさめた豊吉は、息子の勇一をつれて釣に出て行く。勇一は父に連れていってもらうのは初めてだ。今朝方はあんなに酔っていやな父だったが、漁師としての父はやはり素晴らしい。ヘッピリ腰を叱りとばさ

れながらも、「これからの漁師は世間のことも考えなきや、たっていかねえ。かあちゃんはそれを考えてるだ。陸のことは母ちゃやんに聞け。かあちゃんはしっかりしている。だが海の上の事はおれが教える。頭の中へ叩きこむぞ」というのを聞くと櫓を漕ぐ手にも熱がこもって来るのだった。

数日後、海が荒れている。しかも「えびす丸」からの無電連絡が途切れてしまった。村の人達は次々と組合事務所に集って来る。漁が少ないから、南へ下がるといって来たのが最後の無電である。もう今は幾らキイを叩いても返事がない。探しに舟を出せ、ヘリコプターでも飛ばせ、という声も、出船祝いの簡素化をやり遂げた婦人部員には、胸に突き刺さって来る。豊吉の母も、「婦人部に引きずられてお前がいい出すからこんなことになるだ。貧乏人は人にいやがられたら、世渡りが出来なくなるだ」と嫁のさよを非難する。まるでさよが船を沈めたのだといわんばかりである。豊吉だけは「これぐらいの天気で、新しい船が遭難するものかと慰めてくれるのだが……。

やがて、不安は村人達の蔭口となってくる。婦人部同士の間でも、一本釣りの家族と、「えびす丸」の乗子の家の主婦達とが反目を始めそうになる。若しみゆきが「家のおやぢもえびす丸に乗ってる。たとえ沈んでも、たとえ死んでも、あたしは出船式にケチしたからなどと思うもんか」といい切らなかったら、どうなったことだろう。

しかしえびす丸は無事だった。豊吉の信じた通り、無電が故障しただけだったのだ。しかも大漁旗をはためかせて戻って来る。村の人達は躍りあがって船付場へ駆けつけて行く。

さよはただ独り組合事務所の窓から船を迎える。思えば随分大きな抵抗を受けたものだが、これでやっと婦人部活動も一つの大きな壁を破ることができた。またあすからは地味な毎日の斗いが始まるだろう。

うお互の心から平和で喜こびの社会と家庭が創り出される。

役人も漁民も組合の役職員も威張りだけは止めましょう。イバリの中は窮屈だ。

二月四日

13、民草のねがい

よろこびも悲しみも幾年月
過ぐる年にこんな映画が封切られたが、漁協生活十何年の間には、涙の出る程うれしい時もあったし、百度の熱が煮えたぎる様に腹立たしい時もあった。

淡路なる海べの宿ゆ朝雲の
たなびく、空をとほく見さけつ
今から十年も昔であったろうか。陛下がぼくの町に行幸なさった時の御製である。

その時県の水産課か水産試験場であったか、産業的価値は少ないが学術上重視され、県下でぼくの町が著名な産地であるナメクジウオを陛下へ御覧に供するので採取した場合は連絡されたしとの通報があったので、ぼくは直ちに街の掲示板や浴場に、体長約一寸一分、わずかに赤味を帯びた透明体で脳、心臓等の分化を見ず、血液無色、眼、脊椎、顎骨、鰓弓を欠く等その体制を書き添えて捕獲したら届けてくれる旨のビラを貼

〝ある漁協職員の〟

樂　餓　鬼　帳〟

12、バーバラス

〝十人十腹〟というか、人間の気質はさまざまだ。漁協という集団の中に長くいると、それがよく分る。精神的栄養の豊富な人、不健康な人、謙虚な人。人のよい人、悪い人、いろいろだ。

だが
人間としての教養が身についてない人は矢鱈に威張りたがる。
（イバツて見ても詮方ないとは知りつつ、そんな傾向がぼくらにも強い）

戦時中の軍隊は士官は下士官にイバリ、下士官は兵にイバったものだ。しかし心ある軍人は決してイバリを用いなかった。

野蛮の樹にはイバリの花が咲く。こんな心理方則を知らなかったり、イバラれケンもホロロにあしらわれても、これに妙に従順してゆくし、エライ奴はイバルという日本俗間の真理がイバル奴は偉いという錯覚を起してゆくものだ。許し合い信じ合

った。

幾日も経ずして……春雨煙る朝まだき、目が醒めると妻が

「風呂屋に貼ってあるものを五匹そこのバケツに入れて某が持って来て呉れた」

という。

早速雀躍りしながら、しかもうやうやしくその蓋にしてあるボール紙をとってみる。

何と中には下に三匹、バケツの側に這い上ってきた二匹の蛞蝓（なめくじら）が平然と控えて御座る。

ぼくはその折の唖然とした光景と、その後暫らくして落付きを取り戻し海を探がさずに山に求めて早春のうすら寒い雨に濡れながら、陛下に捧げる供覧物を真剣に探索してくれた漁業者某氏の素朴なこころねに非常にうたれた。

そんなナンセンスに似た些事が今でも忘れ難い。それがうれしかった事の一つである。

年移り、月変り、東宮（はるのみや）殿下の御成婚、世を挙げて寿ぎ奉る皇孫（すめみま）の皇子（みこ）のご降誕。

ぼくはこの佳き日に年老いて今は亡き某漁夫の為に陛下の御前に、一匹のいとしいなめくじらを捧げたい。

（二月二十四日）

昭和三十四年十一月、十二月の海面漁獲の概要

昭和三十四年十一月の総漁獲量は八、一一六トンで平年より約一、〇〇〇トン、十二月は、六、〇六八トンで平年より約五〇〇トンと、いづれも多い。これは、主として内海において、イワシとアジの漁獲が良かったためで、日本海では全般に各漁業とも低調で、漁獲は平年より少ない。

今期において特に注目すべきは、アジが内海、日本海の両海域とも豊漁であったことと、内海のタコ、日本海のスルメイカが昨年より悪く、二年つづきの不漁に終っていることである。

（兵庫県水産課）

昭和三十四年一月―十二月 海面漁獲の概要

(1) 総漁獲量

昭和三十四年一月～十二月の一ケ年間における兵庫県下の海面総漁獲量は、八九、一五三トン（漁獲金額、約三十五億円）で、前年より約三、〇〇〇トン多く、過去の最高であった昭和三十二年の総漁獲量九二、二九四トンに次ぐものであり、平年漁獲量より約五、〇〇〇トン（六パーセント）多くなっている。これはイワシの漁獲量が、ともに好漁で平年の二〇パーセント増を示したためである。日本海側では、スルメイカ、カレイ、タラ等の不漁により平年以下の漁獲に終っている。

(2) 瀬戸内海

瀬戸内海側における昭和三十四年の年間漁獲量は五三、三二八トン（漁獲金額、約二十四億円）で、平年漁獲量より約六、〇〇〇トン（一三パーセント）多い。これは、前述のようにこの海域における総漁獲量の約六〇パーセントを占めるイカナゴ及びイワシの漁獲が良好であったことによるが、このように両魚種が同一年度に多獲されることは、珍らしい現象である。しかし、漁獲の伸びは、いづれも価格の低い魚種によるもので、一本釣、延縄、たこつぼ等零細漁家が対象としているタイ、ブリ、サワラ、タコ、ハモ等の高価な水族は、漁船の動力化、漁業技術の発達、労働時間の延長にもかかわらず漁獲は依然頭打ち又は漸減の傾向にあり、特にタコは平年より一、一〇〇トンも少く、昭和三十三年以来二年つづきの凶漁である。

(3)、日本海

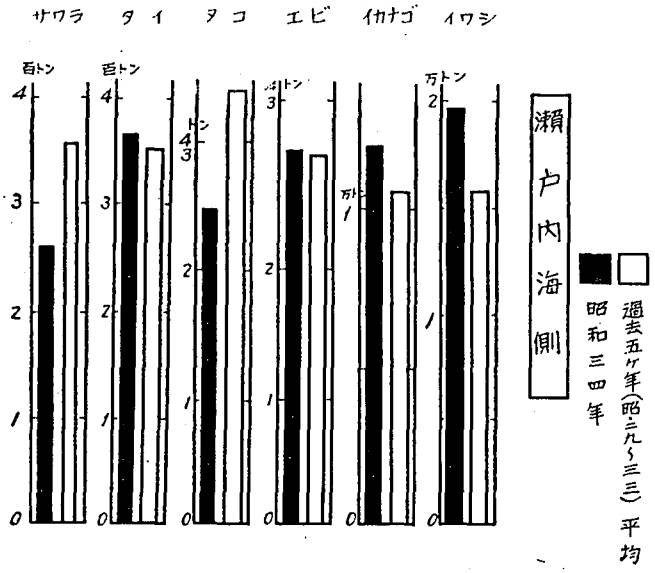
日本海側における昭和三十四年の漁獲量は、三五、八二五トン（漁獲金額、約十一億円）で、平年漁獲量より約一、〇〇〇トン（三パーセント）少い。これは、スルメイカの漁獲が平年の半分以下であったことと中型機船底びき網漁業が、カレイ、タラ等の漁獲不振により、例年の九四パーセントの水揚げに終ったため

である。しかし、アジが近年にない豊漁で平年の四倍以上も漁獲されたので、スルメイカ、カレイ、タラ等の不漁にかかわらず、総漁獲量は、平年と大差がない。

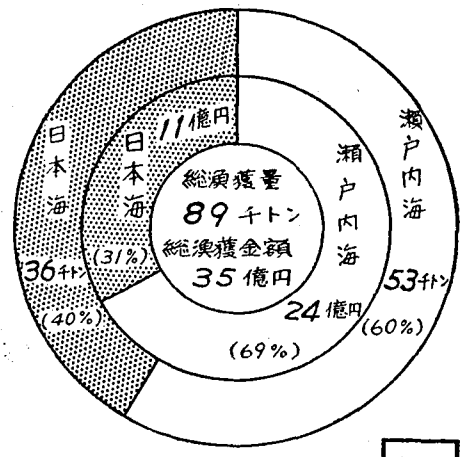
好漁であったアジは、主として巾着網と浮敷網漁業によって漁獲されたもので、この海区の漁家数の七〇パーセントを占める一本釣漁家が対象とするスルメイカが、二年つづきの不漁であったことは、これら零細漁家の経済に大きく影響している、

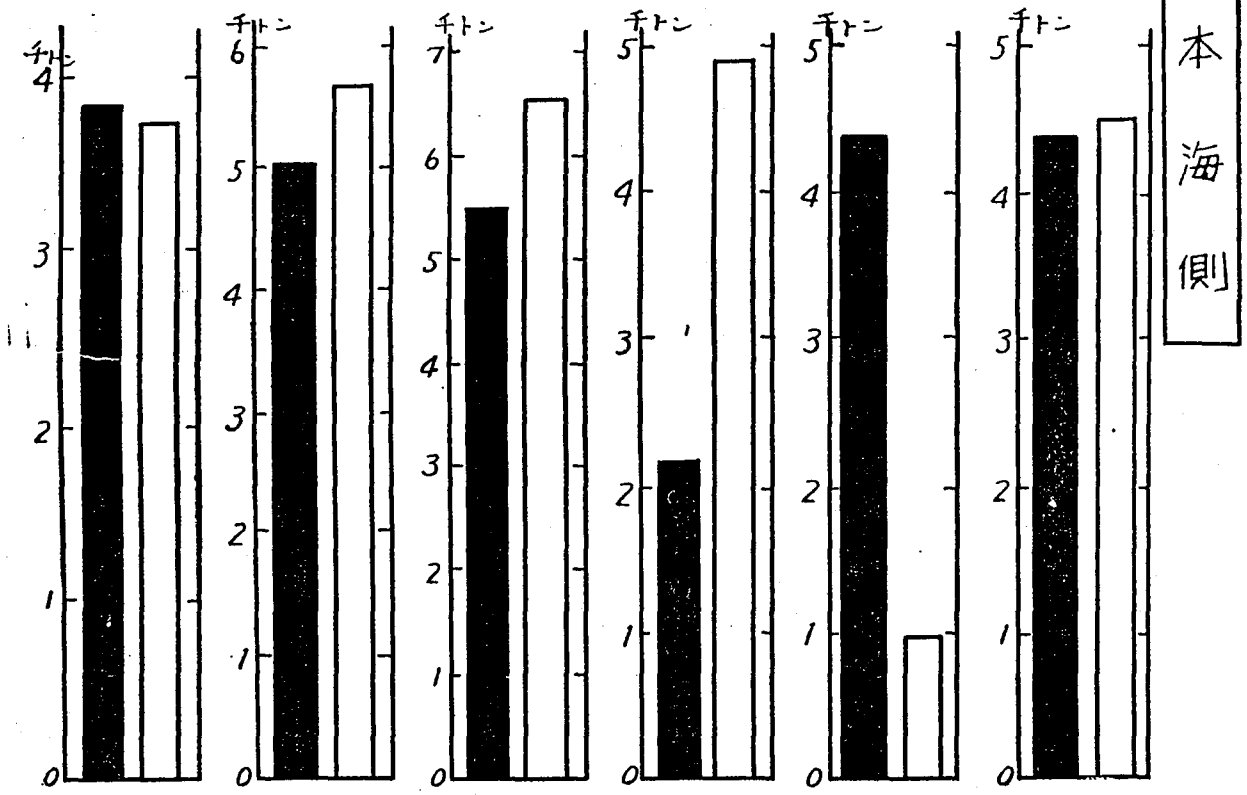
(4)、海　区　別

昭和三十四年の県下海面総漁獲量を摂津、播磨、淡路、但馬の四海区にわけて平年漁獲量と此較すると、摂津海区では約四、八〇〇トン、播磨海区では約二〇〇トン、淡路海区で約一、二〇〇トンと、内海側の各海区は、いづれも増加している。中でも摂津海区では、イワシ、イカナゴが特に好漁であったので、平年の三四パーセントの増加を示している。播磨海区と淡路海区ではイワシイカナゴの漁獲は平年より稍々良か



主要魚種の昭和三四年における漁獲量と過去五ヶ年平均漁獲量との比較





昭和34年海区別漁獲量

海区 / 年度 / 種別	県計 34年	県計 29～33 5年平均	県計 増減量	県計 率	摂津 34年	摂津 29～33 5年平均	摂津 増減量	摂津 率	播磨 34年	播磨 29～33 5年平均	播磨 増減量	播磨 率
総計	89,152.6	84,031.0	5,121.6	106	18,850.5	14,038.9	4,811.6	% 134	14,790.3	14,595.0	195.3	% 10
魚類	69,793.0	62,496.1	7,296,9	112	17,622.0	12,631.8	4,990.2	14	10,067.6	9,468.7	598.9	106
水産動物類	14,908.9	17,752.1	△ 2,843.2	84	573.2	540.4	32.8	106	2,548.8	3,279.3	△ 730.5	78
貝類	3,384.3	2,964.6	419.7	114	579,9	765.0	△ 185.1	76	1,490.1	1,576.4	△ 86.3	95
藻類	1,066.4	818.2	248.2	130	75.4	101.7	△ 26.3	74	683.8	270.6	413.2	253

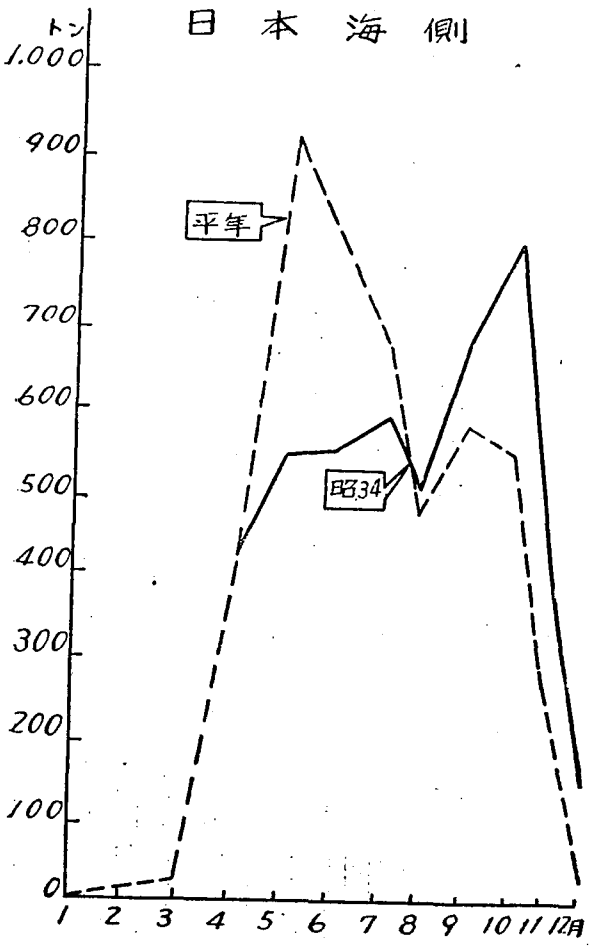
淡路 34年	淡路 29～33 5年平均	淡路 増減量	淡路 率	但馬 34年	但馬 29～33 5年平均	但馬 増減量	但馬 率
屯 19,686.7	屯 18,470.4	屯 1,216.3	% 107	屯 35,825.1	屯 36,926.7	屯 △ 1,101.6	% 97
13,680.9	13,247.9	433.0	103	28,422.5	27'147.7	1,274.8	105
4,700.2	4,539.6	160.6	104	7,086.7	9,392.8	△ 2,306.1	75
1,161,9	522.2	639.7	223	152.4	101.0	51.4	151
143.7	160.7	△ 17.0	89	163.5	285.2	△ 121.7	57

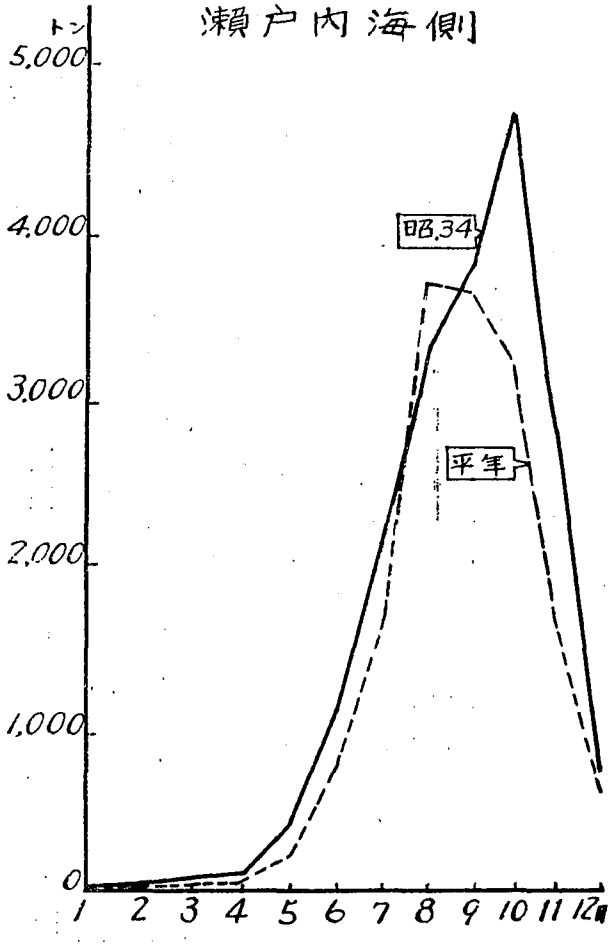
ったがタコ、サワラ等の高価な水族が不漁であった関係から、漁獲金額に伸びはなく、ことに播磨海区では漁獲量の増加とは逆に漁獲金額は、平年をかなり下廻っているものと推測される。

但馬海区では、前述のように平年より約一、〇〇〇トンの減産であって、漁獲金額では、平年より一億円位減少している。

（兵庫県水産課）

昭和34年のイワシの漁獲状況





昭和34年11月中の海面漁獲量　（単位：トン）

海区 年度 魚種		県総計 34年	県総計 33年	県総計 増減量	県総計 率	瀬戸内海 34年	瀬戸内海 33年	瀬戸内海 増減量	瀬戸内海 率	日本海 34年	日本海 33年	日本海 増減量	日本海 率
総計		8,116.0	6,451.5	1,664.5	126	4,646.5	2,939.7	1,206.8	158	3,469.4	3,511.8	△ 42.4	99
魚類	イワシ	2,897.2	894.6	2,002.6	324	2,617.7	462.7	2,115.0	565	279.6	432.0	△ 152.4	65
	イカナゴ	114.8	553.9	△ 439.1	21	114.8	553.9	△ 439.1	21	—	—	—	—
	タラ	665.1	278.3	386.8	238	—	—	—	—	665.1	278.3	386.8	239
	カレイ	518.0	577.5	△ 59.5	90	73.9	113.0	△ 39.1	65	444.1	464.5	△ 20.4	96
	タイ	31.2	33.2	△ 2.0	94	24.7	17.8	6.9	139	6.5	15.4	△ 8.9	42
	サバ	21.3	14.6	6.7	146	3.0	3.8	△ 0.8	79	18.4	10.8	7.6	184
	アジ	528.1	190.4	337.7	277	136.4	30.5	105.9	447	391.7	159.8	231.9	245
	サワラ	36.1	47.1	△ 11.0	77	35.2	47.1	△ 11.9	75	1.0	—	1.0	—
	ブリ ハマチ	91.0	19·1	71.9	477	22.1	9.2	12.9	238	68.9	9.9	59.0	695
	ボラ	27.6	21.3	6.3	129	27.6	21.2	6.4	130	—	0.1	△ 0.1	—
	ハモ	19.2	9.5	9.7	202	19.2	6.6	12.6	292	—	2.8	△ 2.8	—
	アナゴ	87.0	95.0	△ 8.0	92	85.5	94.7	△ 9.2	90	1.5	0.3	1.2	500
	シイラ	0.4	0.2	0.2	200	0.4	—	0.4	—	0	0.2	△ 0.2	—
	サメ	13.4	9.5	3.9	141	8.9	8.6	0.3	104	4.5	1.0	3.5	450
	ハタハタ	74.0	112.5	△ 38.5	66	—	—	—	—	74.0	112.5	△ 38.5	61
	ニギス	277.7	344.6	△ 66.9	81	—	—	—	—	277.7	344.6	△ 66.9	81
	その他の魚類	564.0	550.0	14.0	103	438.6	342.9	95.7	128	125.4	207.1	△ 81.7	61
	（魚類計）	5,966.1	3.751.3	2,214.8	159	3,608.0	1,712.0	1,896.0	211	2,358.1	2,039.3	318.8	116
水産動物	スルメイカ	11.9	187.9	△ 176.0	6	—	—	—	—	11.9	187.9	△ 176.0	6
	その他のイカ	209.0	450.6	△ 241.6	46	159.3	321.9	△ 162.6	49	49.7	128.6	△ 78.9	39
	タコ	172.8	320.6	△ 147.8	54	156.8	304.7	△ 147.9	51	16.0	15.8	0.2	101
	エビ	519.7	299.5	220.2	174	418.0	250.8	167.2	167	101.7	48.7	53.0	208
	カニ	925.2	1,086.4	△ 161.2	85	13.5	17.6	△ 4.1	74	911.7	1.068.8	△ 157.1	85
	ナマコ	16.9	43.8	△ 26.9	39	16.9	43.8	△ 26.9	39	—	—	—	—
	その他の水産動物	6.9	0.8	6.1	862	6.9	0.8	6.1	862	—	—	—	—
	（水産動物計）	1,862.4	2,389.4	△ 527.0	78	771.4	939.6	△ 168.2	82	1,091.0	1.449.8	△ 358.8	75
貝類	貝類	286.4	309.7	△ 23.3	92	266.0	287.0	△ 21.0	93	20.3	22.7	△ 2.4	89
藻類	藻類	1.1	1.1	0	100	1.1	1.1	0	100	—	0	—	—

（注）△は減　○は漁獲量50kg未満（50kg以上は100kgに切上げ）

昭和34年12月中の海面漁獲量（単位：トン）

海区 年度 / 魚種		県総計 34年	県総計 33年	県総計 増減量	県総計 率	瀬戸内海 34年	瀬戸内海 33年	瀬戸内海 増減量	瀬戸内海 率	日本海 34年	日本海 33年	日本海 増減量	日本海 率
総計		6,067.8	7,327.5	△ 1,259.7	83	2,549.2	2,398.8	150.4	106	3,518.6	4,928.6	△ 1,410.0	71
魚類	イワシ	746.7	268.4	478.3	278	611.5	268.0	343.5	228	135.3	0	135.3	
	イカナゴ	100.4	256.4	△ 156.0	39	100.4	256.4	△ 156.0	39				
	タラ	391.9	129.3	262.6	303					391.9	129.3	262.6	303
	カレイ ヒラメ	420.4	539.2	△ 118.8	78	101.3	118.3	△ 17.0	86	319.1	420.9	△ 101.8	76
	タイ	24.0	27.7	△ 3.7	87	20.3	21.6	△ 1.3	94	3.7	6.1	△ 2.4	61
	サバ	12.4	0.2	12.2	6200					12.4	0.4	12.2	6200
	アジ	142.1	34.9	107.2	41	40.5	3.4	37.1	1119	101.5	31.5	70.0	322
	サワラ	27.0	34.6	△ 7.6	78	27.0	34.6	△ 7.6	78				
	ブリ ハマチ	36.2	9.6	26.6	377	5.0	2.1	2.9	238	31.2	7.5	23.7	416
	ボラ	15.7	15.2	0.5	103	15.7	15.1	0.6	104		0.1	△ 0.1	
	ハモ	4.0	2.3	1.7	174	3.8	1.2	2.6	317	0.2	1.2	△ 1.0	17
	アナゴ	119.6	128.3	△ 8.7	93	119.2	128.2	△ 9.0	93	0.4	0.1	0.3	400
	シイラ		0.1	△ 0.1			0.1	△ 0.1					
	サメ	7.8	11.3	3.5	69	6.2	10.1	△ 3.9	61	1.7	1.3	0.4	131
	ハタハタ	77.6	281.7	△ 204.1	28					77.6	281.7	△ 204.1	28
	ニギス	99.7	186.2	△ 86.5	54					99.7	186.2	△ 86.5	54
	その他の魚類	472.1	579.3	△ 107.2	81	357.9	437.5	△ 79.6	82	114.2	141.8	△ 27.6	81
	（魚類計）	2,697.7	2,504.7	193.0	108	1,408.7	1.296.4	112.3	109	1,289.0	1,208.3	80.7	107
水産動物	スルメイカ	1,194.5	2,669.6	△ 1,475.1	45					1,194.5	2,669.6	△ 1,475.1	45
	その他のイカ	138.8	198.2	△ 59.4	70	119.7	180.4	△ 60.7	66	19.1	17.7	1.3	107
	タコ	155.4	116.7	38.7	133	144.8	105.6	39.2	137	10.6	11.1	△ 0.5	95
	エビ	277.3	140.2	137.1	198	187.9	124.1	63.8	151	89.4	16.1	73.3	555
	カニ	910.0	998.0	△ 88.0	91	14.1	12.2	1.9	116	895.9	985.7	△ 89.8	91
	ナマコ	103.3	100.2	3.1	103	103.3	100.2	3.1	103				
	その他の水産動物	2.3	1.2	1.1	192	2.3	1.1	1.2	209		0.1	△ 0.1	
	（水産動物計）	2,781.5	4,224.1	△ 1,442.6	66	571.9	523.7	48.2	109	2,209.5	3,700.3	△ 1,490.8	60
貝藻類	貝類	493.3	539.9	△ 46.6	91	473.2	519.9	△ 46.7	91	20.0	20.0	0	100
	藻類	95.4	58.8	36.6	162	95.4	58.8	△ 36.6	162		0	0	

（注）△　減　　○は漁獲量50kg未満（漁獲量50kg以上は100kgに切上げ）

昭和34年（1月～12月）海面漁獲量　（単位：トン）

海区	魚種＼年度	県総計 34年	県総計 33年	県総計 増減量	県総計 率	瀬戸内海 34年	瀬戸内海 33年	瀬戸内海 増減量	瀬戸内海 率	日本海 34年	日本海 33年	日本海 増減量	日本海 率
総計		89,152.6	84,031.0	5,121.6	106	53,327.5	47,104.3	6,223.2	113	35,825.1	36,926.7	△ 1,101.6	97
魚類	イワシ	24,208.6	20,254.6	3,954.0	120	19,734.8	15,655.2	4,079.6	126	4,473.8	4,599.4	△ 125.6	97
	イカナゴ	13,645.3	11,261.0	2,384.3	121	13,645.3	11,261.0	2,384.3	121	—	—	—	—
	タラ	5,048.4	5,783.2	△ 734.8	87	—	—	—	—	5,048.4	5,783.2	△ 734.8	87
	カレイ ヒラメ	6,573.3	7,376.0	△ 802.7	89	1,068.3	737.6	330.7	145	5,505.0	6,638.4	△ 1,133.4	83
	タイ	446.6	437.4	9.2	102	364.3	339.1	25.2	107	82.3	98.3	△ 16.0	84
	サバ	506.6	742.8	△ 236.2	68	14.9	244.0	△ 229.1	6	491.7	498.8	△ 7.1	99
	アジ	5,189.1	1,965.4	3,223.7	264	958.4	969.7	△ 11.3	99	4,230.7	995.7	3,235.0	425
	サワラ	266.7	352.2	△ 85.5	76	265.6	351.6	△ 86.0	76	1.1	0.6	0.5	183
	ブリ ハマチ	601.2	402.0	199.2	150	193.4	191.2	2.2	101	407.8	210.8	197.0	193
	ボラ	233.6	257.4	△ 23.8	91	233.1	256.8	△ 23.7	91	0.5	0.6	△ 0.1	83
	ハモ	268.8	455.7	△ 186.9	59	259.4	434.2	△ 174.8	60	9.4	21.5	△ 12.1	44
	アナゴ	787.1	712.0	75.1	111	782.2	698.0	84.2	112	4.9	14.0	△ 9.1	35
	シイラ	134.8	189.6	△ 54.8	71	17.1	42.8	△ 25.7	40	117.7	146.8	△ 29.1	80
	サメ	264.3	289.8	△ 25.5	91	98.6	58.0	40.6	170	165.7	231.8	△ 66.1	71
	ハタハタ	2,944.4	1,978.7	965.7	149	—	—	—	—	2,944.4	1,978.7	965.7	149
	ニギス	3,618.3	4,151.5	△ 533.2	87	—	—	—	—	3,618.3	4,151.5	△ 533.2	87
	その他の魚類	5,055.9	5,866.8	△ 830.9	86	3,735.1	4,109.2	△ 374.1	91	1,320.8	1,777.6	△ 456.8	74
	（魚類計）	69,793.0	62,496.1	7,296.9	112	41,370.5	35,348.4	6,022.1	117	8,422.5	27,147.7	1,274.8	105
水産動物	スルメイカ	2,089·2	4,948.0	△ 2,858.8	42	—	—	—	—	2,089.2	4,948.0	△ 2858.8	42
	その他のイカ	2,011.1	1,624.5	386.6	124	1,639,0	1,202.3	436.7	136	372.1	422.2	△ 50.1	88
	タコ	2,575.1	3,669.2	△ 1,094.1	70	2,412.5	3,541.6	△ 1,129.1	68	162.6	127.6	35.0	127
	エビ	3,379.5	3,042.4	337.1	111	2,910.0	2,864.2	45.8	102	469.5	178.2	291.3	263
	カニ	4,329.1	3,979.6	349.5	109	360.2	272.7	87.5	132	3,968.9	3,706.9	262.0	107
	ナマコ	416.2	435.3	△ 19.1	96	415.1	431.2	△ 16.1	96	1.1	4.1	△ 3·0	27
	その他の水産動物	108.7	53.1	55.6	205	85.4	47.3	38.1	181	23.3	5.8	17.5	402
	（水産動物計）	14,908.9	17,752.1	△ 2,843.2	84	7,822.2	8,359.3	△ 537.1	94	7,086.7	9,392.8	△ 2,306.1	75
貝藻類	貝類	3,384.3	2,964.6	419.7	114	3,231.9	2,863.6	368.3	113	152.4	101.0	51.4	151
	藻類	1,066.4	818.2	248.2	130	902,9	533.0	369.9	169	163.5	285.2	△ 121.7	57

（注）△減は　○は50kg未満（50kg以上は100kgに切上げ）

第三種郵便物認可　　拓　水　43号　　昭和34年3月15日発行

われらの漁民銀行

兵庫県信用漁業協同組合連合会

会　長　島田文治郎

本　所　兵庫県立水産会館内　　直通電話⑥0193
但馬支所　香住町中浜頭　　香住125

購買品は漁連で

兵庫県内海漁業協同組合連合会

会　長　三浦清太郎

本　部　兵庫県立水産会館内　　直通電話⑤3424—5
明石油槽所　明石市船町　　明石3207
富島油槽所　北淡町富島　　富島　66
仮屋出張所　淡路町仮屋　　仮屋　59

購買品は系統利用

但馬漁業協同組合連合会

会　長　西上重弐

城崎郡香住町香住　　電話香住154

神戸市兵庫区新在家町　兵庫県立水産会館　電話⑤8301（事務所）　電話⑤9563（宿泊所）

発行所　神戸市兵庫区新在家町 123　兵庫県立水産会館内　兵庫県漁業協同組合連合会
発行人　三浦清太郎